

総説 北洋世界の統治空間

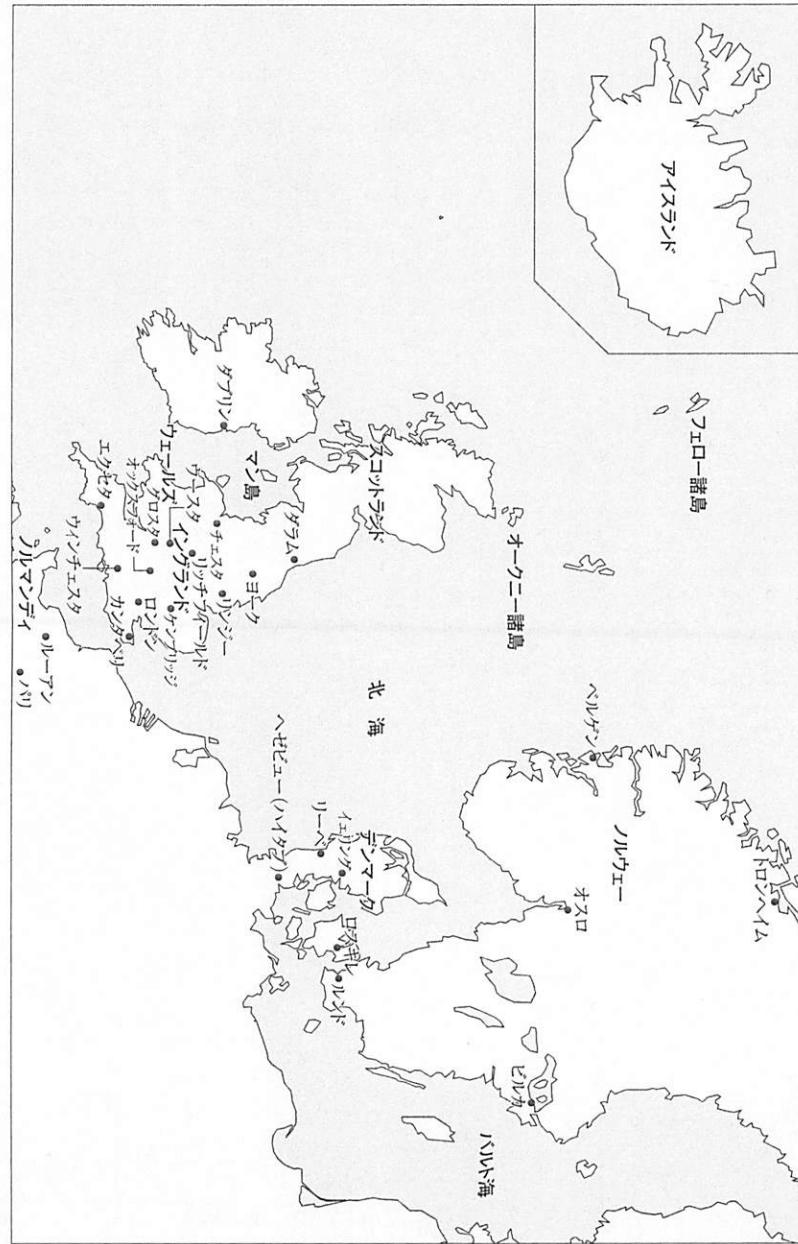
第一節 北大西洋からロシア平原へ——海域・島嶼・ステップ

北海を挟んで向き合うブリテン諸島とスカンディナヴィアは、時として北ヨーロッパと呼ばれることがある。この二つの歴史空間は、一見すると全く別の歴史経路を辿つてきている。すなわち、ブリテン諸島はローマ帝国の属州ブリタニアとして古代以来の高度な統治構造が敷設された先進地域である一方、スカンディナヴィアは一〇世紀半ばにようやくキリスト教を受容し国家が形成される辺境という後進地域だという、対照的な歴史である。そのためこの二つの世界は、別個の性格を持つた、独立した空間として研究対象とされてきた。⁽¹⁾

他方でこの二つの空間は、中世初期以来強い結びつきを持っている。すなわち、民族移動期にスカンディナヴィアのユトランド半島周辺からブリテンに移動したイングランド人やサクソン人が初期中世イングランドにおける民族集団の核になり、八世紀末以降ノルウェーやデンマークから拡大したスカンディナヴィア人がブリテン全体に定住し、他方で一世紀のデン朝時代にはイングランドからキリスト教や統治制度が北欧へ「輸出」され、一三世紀にはパース

小澤 実

第一部開運地図



条約によりスコットランドとノルウェーの島嶼が交換され、一五世紀には中世末の英國商人によるアイスランド水産資源の独占的交易が行われた。⁽²⁾

この二つの世界をつなげていたのは北海である。北海は、フリースラント人、ヴァイキング、ハンザ商人などが、独自の船舶と航海技術を駆使し、両世界の交易の担い手として活動する場を与えた。⁽³⁾ しかし両世界をつないだのは北海だけではない。考古学者のパリー・カソリフが長期スパンで見事に叙述するように、北極圏を含む北大西洋から北海をへてバルト海、そして中央アジアへつながるステップへと接続する黒海やカスピ海に至るまでの海域、島嶼、河川、沼沢のネットワークの中に、ブリテンもスカンディナヴィアも浮かんでいた。たとえばヴァイキングが活躍する八世紀から一一世紀にかけては、ブリテンと北欧にイスラームやビザンツ起源の大量の富をもたらし、それと引き換えにブリテンや北欧から奴隸や毛皮のような資源を輸出する経済システムが、この北洋の海域世界を舞台に展開された。⁽⁴⁾ このような経済システムは、地中海や大陸とは別個に、しかしそのいずれとも深く関連しながら、独自の機能をなった。初期中世におけるアンゴロサクソン諸国、ケルト周縁の権力体、スカンディナヴィア、そしてそこから強い影響を受けたルーランなどの政治体は、このような経済システムに刺激を受け、そしてその経済システムを手中にすることによって形成されてきたものである。⁽⁵⁾ ローマ時代より一五世紀に至るまで、遊牧諸民族が寄せてはかえすヨーロッパ半島という歴史的空间は、ジャネット・アブーリルゴドの言う「ヨーロッパ霸權以前」の世界システムにおけるサブシステムの一つとして、アフロ・ユーラシア世界の一部を成していたことを前提にするならば、その最果てにあるブリテンとスカンディナヴィアの歴史展開もまた、大きなシステムの中に位置付ける必要があるだろう。⁽⁶⁾

中世温暖期が終焉を迎える気候が不安定化し、黒死病の猖獗により人口の激減と社会の変化を伴う中世後期は、ハンザによる北ヨーロッパ経済ネットワークに組み込まれつつ、ブリテンはフランスとの百年戦争へ、スカンディナヴィアはカルマル連合体制へと、それ以前とは別個の展開をたどる。⁽⁷⁾ ここでは一三世紀以前の北ヨーロッパ世界に関する

研究を、統治に着目しながら振り返ってみたい。

第二節 ブリテン諸島

一九世紀から二〇世紀半ばにかけてのブリテン史研究は、基本的にナショナルな枠組みのもと進められてきた。そもそもブリテンという枠組みすらなく、イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズはそれぞれ別個の歴史空間として認識されていた。オックスフォードやケンブリッジの欽定講座をつとめる中世史家は、基本的にイングランド国制史を専門としていた。⁽⁸⁾ コモンロー、議会制度、行政システム、社会契約などの担い手たる歴史家を自認する彼らは、近代歴史学搖籃の地ドイツから影響を受けつつも独自の道行きで、中世の統治システム研究をおこなめた。⁽⁹⁾ 他方で、地域ナショナリズムを反映した研究もまた、スコットランド、ウェールズ、アイルランドで盛んに行われた。それらの「地域」では、それぞれのネイションの展開過程に応じた通史や研究が刊行された。

こうした成果を受けた日本における中世イギリス研究もまた、基本的にナショナルな枠組みでの展開を原則としていた。メイテランドやクライムズの基本書の翻訳に加えて、研究史整理と一次史料に基づく本格的かつ古典的な研究として、青山吉信、佐藤伊久男、城戸毅らのモノグラフを挙げておきたい。⁽¹⁰⁾

(1) 近年の研究

一三世紀以前の統治システム研究について、ここ三〇年を振り返ると、アンゴロサクソン史の進展がめざましい。一言で言えば、ヴァイキングの侵入による混乱などもあり、ノルマン征服以降に比べて未発達であったとされた一〇六六年以前の統治機構が、想定以上に機能していたことが証明されつつある。⁽¹¹⁾ 第一に法行政について。大陸との比較

も射程に入れながら、イングランド諸王の法実践や証書実践の積極性を再評価する研究が次々に刊行された⁽¹³⁾。第一に国王像の変化について。年代記や行政文書のみならず、図像、貨幣、考古資料などを用い、初期中世イングランド統合過程においてリーダーシップを示す国王像が示されるようになつた⁽¹⁴⁾。第三に地方統治について。激増する考古資料と地域特性を考慮しながら、アンゴロサクソン諸王国のそれぞれの特徴を比較史的に検討した研究⁽¹⁵⁾や、王国それぞれの発展過程に注目する研究が現れている⁽¹⁶⁾。第四に歴史記述について。記述史料を単なる事実やイデオロギーの発露として読むのではなく、統治というコンテキストをふまえた書記権力という道具という観点での研究が進展しつつある⁽¹⁷⁾。第五に貨幣について。発掘や統計が格段に進んだことを背景に、古錢学の蓄積を国王統治に位置付ける試みが盛んとなつてゐる⁽¹⁸⁾。

(2) ブリテン、海峡、そしてヨーロッパ大陸

国史たるアンゴロサクソン史の研究が進む一方で、イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズというネイション単位ではなくブリテンという観点での研究も増えている。一つの成果として、『オックスフォード版ブリテン諸島の歴史』を挙げておきたい⁽¹⁹⁾。巻による粗密はあるにせよ、ブリテンという枠組みで従来の各ネイションを統合しようとした試みである。英國においてこのような観点を推進することになったのは、ウェールズを検討したR・リース・ディヴィスによる成果の影響が大きい⁽²⁰⁾。彼は四つのネイションの相互作用、というよりもむしろイングランド王国による征服と収奪という観点から中世ブリテン史の構造を明らかにした。その傾向は、ネイションや封建制という社会科学概念の再検討を迫るスーザン・レイノルズの研究と相まって、イングランドのみならず、他の地域におけるネイションのあり方を記述する作業にも影響を与えた⁽²¹⁾。

イングランド史にとっての大転換点であるノルマン征服とアンゴロノルマン国家については数多くの研究が刊行さ

れてきた⁽²²⁾。一二一五年におけるノルマンディ喪失に至るまで、海峡を挟んだ両世界の統治は、イングランド統治構造研究にとつて本質的な課題であつた⁽²³⁾。近年強調されるのは、アンゴロサクソン期との連続性について、海峡の持つ機能について、歴史記述を通じての両世界の結びつきについて、などである⁽²⁴⁾。海上王国としてのアンゴロノルマン国家は、ドゥームズデイブックやバイユータベストリといった著名史料の再検討も含め、北洋世界の統治空間を考える上で今後より深く追究すべき課題である⁽²⁵⁾。

ノルマン国家との関連において、ブリテンと大陸との関係についてふれておきたい。初期中世イングランドと大陸との関係について深い考察を行つたのは、ドイツからの亡命歴史家ヴィルヘルム・レビイゾンである⁽²⁶⁾。イングランドは、カロリング世界やスカンディナヴィアと積極的交流をしたアンゴロサクソン時代のち、ノルマン征服以降はすでに述べたようにノルマンディと、アンジュー朝以降は、婚姻、十字軍、教皇などを通じてさらに深く大陸世界と結びついた⁽²⁷⁾。かつてはコモンローをはじめとしてイングランドの特異性を強調する傾向があつたのに対し、近年は、大陸からの影響を十分に考慮した上で、広大かつ複雑な地域特性を持つ帝国的空間をいかにして統治したのかという観点での研究が増加しつつある⁽²⁸⁾。スザン・レイノルズ以来の比較が重視されている、と言える⁽²⁹⁾。

第三節 スカンディナヴィア

ブリテンと同様に北欧諸国も、一九世紀から二〇世紀にかけては基本的にナショナルな枠組みのもとに研究が進められてきた。北欧諸国出身者ではない我々は北欧やスカンディナヴィアとひとまとめにしがちであるが、現地において北欧全体が一つの歴史空間として扱われてきたことはほとんどなかつたと言つてよい。とりわけ、行政文書が確認される一二世紀以降に関しては、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンのいずれについてもナショナルヒストリー

としての蓄積がほとんどである。⁽³¹⁾ 英独仏地中海諸国に比べれば史料も少ない地域であるが、それでも各別の史料編纂は進められ、その史料に基づく通史が繰り返し刊行されてきた。⁽³²⁾

一点注目すべきはアイスランドである。法的に言えば、一九四四年までアイスランドが「独立」していたことはない。しかし一三世紀半ばまでのアイスランドは、主に二つの観点から注目を浴びてきた。一つは、北欧の中では例外的に多数伝存するアイスランド語史料の存在である。とりわけサガと総称される記述文学は、支配のあり方も含めアイスランド内そしてノルウェー内の状況を詳細に伝えるため、法や文書に加えて、歴史家の検討材料でもあつた。もう一つは、王のいないアイスランドの統治体制である。研究史上「自由共和国」と称されたアイスランドは、中世における特異な事例として、それを支える法体制や統治構造も含めて多くの研究者の関心をひいてきた。⁽³³⁾ ただしアイスランドはあくまで北欧内の特殊な地域の事例であつて、北欧社会一般を代表するものではないことは注意しなければならない。

(1) 近年の研究

近年の傾向として注目すべきは、それまで盛んであった各別の通史の刊行が途絶える一方で、英語によるモノグラフが刊行されていることである。北欧語が少数言語であることは北欧の研究者自体が認識していたが、長らく、より普遍性のある言語でモノグラフを刊行する研究者は少なかつた。しかしブリルの *The Northern World*などのシリーズ化により、北欧語で刊行された研究書が翻訳されたり、英語論文集が盛んに刊行されることにより、他国の研究者に比較事例を与えることが可能となつていて。加えて、北欧全体を一つの歴史空間として捉えたいという北欧外の視線は、中世北欧という、北欧人自身は持たない視点を、研究史上に現出せしめた。一つの大きな成果は、『ケンブリッジ新中世史』の各巻の論考とクヌート・ヘッレが編んだ通史である。⁽³⁴⁾ さらにそうした成果をふまえた上で、当代を

代表する中世史家スヴェーレ・バッゲは、英語による中世北欧通史を刊行した。⁽³⁵⁾ ヘッレもバッゲも行政史を専門としており、北欧の統治システムの概観を初学者や他の地域の専門家に伝える上で重要な業績を残したと言える。

(2) 海上国家という視点

ヴァイキングが海域を巧みに利用しクヌートが海上王国を構築したことは周知の事実であるが⁽³⁶⁾、その後の北欧諸国の特徴として、三国いずれもが海上国家として機能していったことは想起する必要がある。⁽³⁷⁾ 近年の国制史は、社会史的成果を取り入れると同時に、こうした地理環境と統治の関係をも明らかにしつつある。デンマークは、そもそもユトランド半島・島嶼部・スカンディナヴィア半島南部から構成されていたが、その後、バルト海南岸やエストニアも領域に組み込んだ。⁽³⁸⁾ ノルウェーは、ヴァイキング時代以来、グリーンランドに至るまでの北大西洋の島嶼に影響力を行使していたが、一三世紀半ばには、制度的には「植民地」としてそれらを王国に組み込んだ。⁽³⁹⁾ とりわけノルウェーに関しては、ステイナル・イムセンが主導するプロジェクトの結果として、海上国家に関する研究が飛躍的に進展した。⁽⁴⁰⁾ スウェーデンも、フィンランドへの拡大を進めながら、一三世紀にはストックホルムを中心に国家形成が進展した。⁽⁴¹⁾ いずれもコペンハーゲン、ベルゲン、ストックホルムという中心地から支配領域全体を巡るために船舶を必要とした。これはフランスや神聖ローマ帝国とは大きく異なる統治構造を生み出すことになった。

(3) 共時的现象という視点

北欧というナショナルヒストリーを超えた枠組みとヨーロッパの他地域との比較という観点から、北欧三国に共通する現象を抽出しようとする研究が増えていく。第一に北欧法の研究である。⁽⁴²⁾ 各国には重要な法があり、かつてはとりわけ言語史的関心からのアプローチが多かったが、それらを比較し社会における機能を検討することで中世北欧社

会の特徴を引き出そうとしている。第二にキリスト教の拡大と王権との関係である。キリスト教は、単純に君主以下の信仰の転換を図るだけではなく、ラテン・カトリック世界に共通の統治制度や共通価値も導入させた。⁽⁴⁾ 第三に十字軍である。聖地から離れている北欧は、代わりに、いまだ異教徒が多数存在するバルト海沿岸に対する十字軍を展開した。十字軍は、改宗を求めるとともに、領土拡張を図る運動でもあり、各国に統治空間の拡大を促した。これらの視点は、いずれも、中世におけるグローバルな観点の導入に積極的な現在の中世研究において、今後より注目されることになるだろう。

第一部を構成する、アンゴロサクソンを対象とした内川の論考、北ヨーロッパ交易権におけるクスト統治の一側面を扱った小澤の論考、中世ノルウェー行政に関する詳細な動向を整理した成川の動向論文は、いずれも先述した研究動向の枠組みをふまえながら、地域やナショナルな枠組みを超えた新傾向の統治システムのあり方を検討する議論が展開されることになるだろう。

(1) 初期中世に関する英語圏の近年の概論は、両者を射程に收めつつ、しかしあくまでフランス王国の展開を中心に叙述する。⁽²⁾ Chris Wickham, *Framing the Early Middle Ages: Europe and the Mediterranean, 400-800* (Oxford, 2007); Julia Smith, *Europe after Rome: A New Cultural History, 500-1000* (Oxford, 2007); Matthew Innes, *Introduction to Early Medieval Western Europe, 300-900* (London, 2007). 他方でドイツ語圏の研究は、ブリテンやスカンディナヴィアへの根柢は弱いが、遊牧民族も射程に収めている。Johannes Preiser-Kapeller, *Jenseitz von Rom und Karl dem Grossen: Aspekte der globalen Verflechtung in der langen Späteantike* (Vienna, 2018); Mischa Maier, *Geschichte der Völkerwanderung: Europa, Asien und Afrika vom 3. bis zum 8. Jahrhundert n. Chr.* (München, 2020). 両者を統合する形でフランス王国史を記述するのが、佐藤彰一『*フランス史I—クローヴィス以前*

古屋大学出版会、11011年）である。

(2) Ian Beuermann, *Masters of the Narrow Sea: Forgotten Challenges to Norwegian Rule in Man and in the Isles, 1079-1266* (Oslo, 2007); Edward Cowan, "Norwegian Sunset—Scottish Dawn: Hakon IV and Alexander III," in Norman H. Reid, ed., *Scotland in the Reign of Alexander III, 1249-1286* (Edinburgh, 1990), pp. 103-131; Barbara E. Crawford, *Scandinavian Scotland* (London, 1987); Barbara E.

Crawford, *The Northern Earldoms: Orkney and Shetland from AD 870 to 1470* (Edinburgh, 2013).

(3) デヴィッド・カービー、メルヤリーリサ・シンカネン（玉木俊明監訳）『ヨーロッパの北の海——北海・バルト海の歴史』（刀水書房、11011年）、斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』（悠書館、11011年）。なお歴史の中に広く海域を位置付けるのは、David Afulafia, *The Boundless Sea: A Human History of the Oceans* (Oxford, 2019)。

(4) Barry Cunliffe, *By Steppe, Desert, and Ocean: The Birth of Eurasia* (Oxford, 2015); Barry Cunliffe, *Europe Between the Oceans: 9000 BC-AD 1000* (Oxford, 2008).

(5) たとえば、マレク・ヤンコヴィアク（小澤実訳）『奴隸のためのティルハム——九・一〇世紀のイスラーム世界と北ヨーロッパ間の奴隸交易』（『史苑』八〇一、11011年）三六一六五頁。

(6) このような北ヨーロッパの広域交易システムと権力体との相互作用は、いまだ十分な検討はなされていない。Richard Hodges, *Dark Age Economics: Origins of Towns and Trade, A.D. 600-1000*, 2nd ed. (Bristol, 1989); Richard Hodges, *The Anglo-Saxon Achievement* (Bristol, 1991); Richard Hodges, *Dark Age Economics. A New Audit* (Bristol, 2012).

(7) ジヤネット・アーリルゴド（佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳）『ヨーロッパ霸権以前 もうひとつの世界システム』上下（岩波書店、11011年）、アーリルゴド以降の中世グローバルヒストリーについては、小澤実『中世グローバルヒストリーの潮流』（『史苑』八〇一、11011年）一三五一六六頁。

(8) Isabella Lazzarini, ed., *The Later Middle Ages* (Short Oxford History of Europe) (Oxford, 2021); Monica H. Green, "The Four Black Deaths," *American Historical Review*, vol. 125, no. 5 (2020), pp. 1601-1631; Bruce M. S. Campbell, *The Great Transition. Climate, Disease and Society in the Late-Medieval World* (Cambridge, 2016); フィリップ・ドランジエ（高橋理監訳）『ハンザ 1111-17世紀』（みすず書房、11011年）。

(9) James Campbell, "Stubbs, Maitland, and constitutional history," in *British and German Historiography 1750-1950*, ed. Benedikt Stuchtey & Peter Wende (Oxford, 2000), pp. 99-122.

(10) 聖後統治システム研究の一里塚として、Henry R. Loyn, *The Governance of Anglo-Saxon England, 500-1087* (London, 1984); James Campbell, *The Anglo-Saxon State* (London, 2000).

(11) F·W·メイトランド（小山貞夫訳）『イングランド憲法史』（創文社、一九八一年）、S·B·クライムス（小山貞夫訳）『中世イングランド行政史概説』（創文社、一九八五年）、青山吉信『イギリス封建王制の成立過程』（東京大学出版会、一九七八年）、佐藤伊久男『中世イングランドにおける諸社会の構造と展開』（創文社、11011年）、城戸義『マグナ・カルタの世紀——中世イギリスの政治と国制 一九九一三〇七』（東京大学出版会、一九八〇年）。

- (12) 文獻は枚挙にいたしまがなじが、過去の研究を総括し現在の研究状況を示すのは、Rory Naismith, *Early Medieval Britain, c. 500–1000* (Cambridge, 2021); John Blair, *Building Anglo-Saxon England* (New Haven, 2018); Robin Fleming, *Britain after Rome. The Fall and Rise, 400 to 1070* (London, 2011); Pauline Stafford, ed., *A Companion to the Early Middle Ages: Britain and Ireland, c.500–c.1100* (London, 2009) など。Michael Lapidge et al., eds., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Anglo-Saxon England*, 2nd ed. (London, 2013).
- (13) A. Taylor, 'Lex Scripta and the Problem of Enforcement: Anglo-Saxon, Welsh, and Scottish Law Compared', in F. Pirie & J. Scheele, eds., *Legalism: Community and Justice* (Oxford, 2014), pp. 47–75; Patrick Wormald, *The Making of English Law: King Alfred to the Twelfth Century. Volume I: Legislation and its Limits* (Oxford, 1999); Simon Keynes, *The Diplomas of King Æthelred 'the Unready'*, 978–1016: A Study in their Use as Historical Evidence (Cambridge, 1980).
- (14) Gorges Molyneaux, *The Formation of the English Kingdom in the Tenth Century* (Oxford, 2015); Rory Naismith, *Money and Power in Anglo-Saxon England: The Southern English Kingdoms, 757–865* (Cambridge, 2012); Levi Roach, *Kingship and Consent in Anglo-Saxon England, 871–978: Assemblies and the State in the Early Middle Ages* (Cambridge, 2013).
- (15) Stephen Basset, ed., *The Origins of Anglo-Saxon Kingdoms* (Leicester, 1993).
- (16) Stephen Baxter, *The Earls of Mercia: Lordship and Power in Late Anglo-Saxon England* (Oxford, 2007); James Graham-Campbell et al., eds., *Vikings and the Danelaw* (Oxford, 2001).
- (17) Pauline Stafford, *After Alfred: Anglo-Saxon Chronicles and Chroniclers, 900–1150* (Oxford, 2020); Alice Jorgensen, ed., *Reading the Anglo-Saxon Chronicle: Language, Literature, History* (Turnhout, 2010).
- (18) Rory Naismith, *Medieval European Coinage with a Catalogue of the Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge, 8: Britain and Ireland c. 400–1066* (Cambridge, 2017); 鶴島博和「なぜ銀のべりー貨は中世イングランドにおいて流通したのか——権力＝王權と銀品位と信用＝貴賃製造人の三位一体」(『お茶の水中學』長1'1101八年) 111—151頁。鶴島博和編『前近代ヨーロッパ西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開』(科学研費基盤(A))報告書(Ⅲ・Ⅳ)(熊本、11010年)。
- (19) 鶴島博和の監訳により、慶應義塾大学出版会から全巻翻訳が刊行されている。
- (20) R. R. Davies, *The First English Empire: Power and Identities of the British Isles 1093–1343* (Oxford, 2003); R. R. Davies, *Dominion and Conquest: The Experience of Ireland, Scotland, and Wales 1100–1380* (Cambridge, 2008).
- (21) Susan Reynolds, *The Middle Ages without Feudalism: Essays in Criticism and Comparison on the Medieval West* (Farnham, 2012).
- (22) だいぶばは、Clare Downham, *Medieval Ireland* (Cambridge, 2017); David Petts & Sam Turner, eds., *Early Medieval Northumbria: Kingdoms and Communities, AD 450–1100* (Turnhout, 2012); Hirokazu Tsurushima, ed., *Nations in Medieval Britain* (Donington, 2010); Alex Woolf, *From Pictland to Alba: Scotland, 789–1070* (Edinburgh, 2007).

- (23) Majorie Chibnall, *Debates on the Norman Conquest* (Manchester, 1999).
- (24) Christopher Harper-Bill & Elisabeth van Houts, eds., *A Companion to the Anglo-Norman World* (Woodbridge, 2007).
- (25) 鶴島博和「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環洋世界の「構造」と展開」(『中苑』七五—11'1101五年) 51—108頁。
- (26) David Roffe & Keats-Rohan, eds., *Domesday Now: New Approaches to the Inquest and the Book* (Woodbridge, 2018); 鶴島博和『ハイューの継続を読む——中世のイハカラハシと環洋世界』(山川出版社、1101五年)。
- (27) Francesca Tinti, *Europe and the Anglo-Saxons* (Cambridge, 2021); Veronica Ortenberg, *The English Church and the Continent in the Tenth and Eleventh Centuries: Cultural, Spiritual, and Artistic Exchanges* (Oxford, 1992); David Rollason, Conrad Leyser, & Hannah Williams eds., *England and the Continent in the Tenth Century: Studies in Honour of Wilhelm Levison (1876–1947)* (Turnhout, 2010).
- (28) Robert Bartlett, *England under the Norman and Angevin Kings, 1075–1225* (Oxford, 2000).
- (29) 朝治啓二・渡辺節夫・加藤文編『中世英仏関係史』(創元社、110111年)、朝治啓二・渡辺節夫・加藤文編『帝国』で読み解く中世ヨーロッパ』(リバネスアカデミー、11017年)。
- (30) Susan Reynolds, *Fiefs and Vassals: The Medieval Evidence Reinterpreted* (Oxford, 1994); Susan Reynolds, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900–1300*, 2nd ed. (Oxford, 1997).
- (31) とりわけベルゲン大学の伝統であるノルウェー行政史研究は特筆に値する。Grethe Authen Blom, *Norge i union på 1300-tallet*, 2 vols. (Trondheim, 1992); Knut Helle, *Konge og gode menn i norsk riksstyring* (Bergen, 1972); Knut Helle, *Gulatinget og Gulatingslova* (Leikanger, 2001)。ペウヨーテンについては Thomas Lindkvist, *Plundring, skatter och den feudala statens framväxt* (Stockholm, 1988)。
- (32) とりわけナショナルリストリートとしての北欧諸語の研究については、小澤実「北欧中世中研究の道長編」(『クロナ』14'110011年) 57—74頁。
- (33) Armann Jacobsson & Sverrir Jacobsson, ed., *The Routledge Research Companion to the Medieval Icelandic Sagas* (London, 2019).
- (34) 小澤実「中世アイスランド中學の新展開」(『北欧史研究』11回、11007年) 151—164頁。
- (35) *The New Cambridge Medieval History*, 7 vols. (Cambridge, 1995–2000); Knut Helle, ed., *The Cambridge History of Scandinavia. I: Prehistory to 1520* (Cambridge, 2000); 小澤実「北欧中世中學の到達点」書評: K. Helle (ed.), *The Cambridge History of Scandinavia*

- via I: Prehistory to 1520*, Cambridge: Cambridge UP 2003, xx+872p.」(『北欧史研究』111' 110〇五年) 四五一¹¹¹頁[。]
- (36) Sverre Bagge, *Cross and Scepter: The Rise of the Scandinavian Kingdoms from the Vikings to the Reformation* (New Haven, 2014). 比較視点をへれた近年の研究として Lars Hermanson, *Friendship, Love, and Brotherhood in Medieval Northern Europe, C. 1000–1200* (Leiden, 2019).
- (37) Timothy Bolton, *The Empire of Cnut the Great: Conquest and the Consolidation of Power in Northern Europe in the Early Eleventh Century* (Leiden, 2009). ^{モナリ} 第2章を参照[。]
- (38) Nils Blomkvist, *The Discovery of the Baltic: The Reception of a Catholic World-System in the European North (AD 1075–1225)* (Leiden, 2005).
- (39) Nils Hybel, *The Nature of Kingship c. 800–1300: The Danish Incident* (Leiden, 2017).
- (40) ^{モナリ} Patricia P. Boulhosa, *Icelanders and the Kings of Norway* (Leiden, 2005); Randi Bjørshol Wærdahl, 'To serve a king as all other lands in the world': *The Incorporation and Integration of the King's Tributary Lands into the Norwegian Realm, c. 1195–1397* (Leiden, 2011); Jón Viðar Sigurðsson, *Chieftains and Power in the Icelandic Commonwealth* (Odense, 1999); Id., *Den norrøne verden: Vikingen, kongen, erkebiskopen og bonden* (Oslo, 2008); Gunnar Karlsson, *Godamenning: Staða og áhrif godordsmanna i þjórveldi Íslendinga* (Reykjavík, 2005). ^{モナリ} 諸編者論[。] 第3章を参照[。]
- (41) Steinar Imsen, ed., *The Norwegian Domination and the Norse World c. 1100–1400* (Trondheim, 2010); Id., ed., *Legislation and State Formation: Norway and its Neighbours in the Middle Ages* (Trondheim, 2013); Id., ed., *Rex Insularum: The King of Norway and His 'Skattlands' as a Political System c. 1260–c. 1450* (Bergen, 2014).
- (42) Philippe Line, *Kingship and State Formation in Sweden 1130–1290* (Leiden, 2007).
- (43) Dieter Strauch, *Mittelalterliches nordisches Recht: Ein Quellenkunde* (Berlin, 2016); Stefan Brink & Lisa Collinson, eds., *New Approaches to Early Law in Scandinavia* (Turnhout, 2014).
- (44) Nora Berend, ed., *Christianization and the Rise of Christian Monarchy: Scandinavia, Central Europe and Rus, c. 900–1200* (Cambridge, 2007); Lars Hermanson, *Friendship, Love, and Brotherhood in Medieval Northern Europe, c. 1000–1200* (Leiden, 2019); 成川岳大「11世紀スカンティナヴィア世界における「宗教大司教」としてのルハッセ」(『史料編集』110—111' 110〇11年) 1—111¹¹¹頁[。]
- (45) Eric Christiansen, *Northern Crusades*, 2 ed. (London, 1998); Alan Murray, *Crusade and Conversion on the Baltic Frontier 1150–1500* (London, 2001); Ane Bysted, Carsten Selch Jensen, Kurt Villads Jensen, & John H. Lind, *Jerusalem in the North: Denmark and the Baltic Crusades, 1100–1522* (Leiden, 2012); Iben Fonnesberg-Schmidt, *The Popes and the Baltic Crusades 1147–1254* (Leiden, 2006); Carsten Selch Jensen, Janus Moller Jensen, & Kurt Villads Jensen, eds., *Fighting for the Faith: The Many Crusades* (Odense, 2020). 本語に著しい貢献な業績として、山内進『北の十字軍「ヨーロッパ」の北方拡大』(講談社学術文庫、110〇11年)[。]